

岐阜青年師範学校本科卒業後、関市内の中学校で教職を務め、62年退職。

## 「老いてこそ輝いて生きる」

私もことし齢七十八を数える。人生の円熟期をよりよく生きるために、自分を再考し限りない明日への一步としたい。

“老いる”とは年を取ることで、私たちは誰もが確実に年をとる。若い頃は心身ともに元気で多少の無理は平気、そのうち次第に体のむりが利かなくなり衰えが現れる。

この体力の衰え以上に配意しなければならぬのが心の衰えだ。たとえ、肉体は衰えても心は絶えず若々しくありたいと願うのは私ひとりではないだろう。

日頃、親しい友との会話のなかでお互いの体力の衰え、物忘れ、視力、聴力などが話題になり「その通り」とのことばで終る。

このことは事実には違いないけれど、そのことに心を奪われていては人生の悲哀のみが脳裡をかけめぐって、淋しい限りと云わざるを得ない。

生きているのが精一杯というのではなく、“あれもしよう” “これもしよう” “明日はこれとあれをやらねば” という気持ちを持ち、人生は常に挑戦であるとの気迫を胸に前進したいと願っている。

私は今、幸い人と結びついた仕事を二つ持ち合わせ、生き甲斐として頑張っているきょうこの頃である。

そのひとつは、私が十八才の時、満州（現在の中国東北地方）への渡航に夢を託して学んだ中国語が蘇生して、今、来日中の研修生に日本語を教え、ことしで十四年になる。

私には若い日の大陸へのあこがれがよみがえったようで、彼等の若さと真摯な姿勢に感動し週二回、夜間の学習に精を出している。

帰国した研修生は八十余名。私も彼等の職場訪問とそれと兼ねた中国旅行は数えて十九回。旅程表や切符は自分で手配し、独り旅が楽しめるようになった。

発音が難しい中国語にも少し慣れ、会話を通して意志の疎通が図れ、手紙も書け読め、文通による書簡も厚さ七十五センチになり、集大成として、今、整理中である。

次に、私が二十才の学生時代（終戦前後の食糧難のころ）世話になっていた下宿のおばさんの好意に助けられ、一日二食主義の生活を切り抜けることができた。

この忘れ得ぬ貴重な恩恵に報いるべく取り組んだ学生寮の仕事が、今年で三十年を迎えた。

現代は豊かな時代背景と共に、ワン・ルーム形式の学生下宿が主流。私のところは共同生活（バス・トイレ、共有）を主体とした、十九名の女子大学生の寮である。

しかし、『部屋代が安い』『親代わりの世話』との風評があっただけか、毎年、満室である。

現代っ子を預って世話をするという仕事は絶えず苦楽を伴なうし、責任も重大。親さんの『信頼』学生への『愛情』をモットーに休まない日々を健闘している。

さて、私は健康に恵まれ今日に至った。六十才の時、胃がんの全摘出手術を受け今年で十九年目。食生活にはいろいろと抵抗があるがあまりこのことに気をつかわないようにしている。

かつて、六十キロあった体重は現在、四十五キロ。往時と比べるとすばらしい減量？スマート。瘦身だけど、気力でカバーし、健康管理に鋭意努力しているのが現況だ。

古人の名言「早寝、早起き」を鉄則とし『人から喜ばれるきょうの自分』の座右の銘と縁あって私に与えられた二つの取りくみを自分のライフ・ワークとして頑張っていきたい。